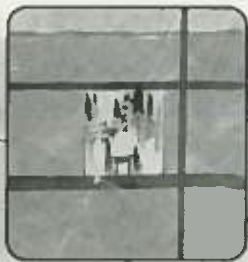


十和田市立 新渡戸記念館だより

新しい展示資料 慶応元年(1865)の検地絵図 —今と昔の違いに見える時代の流れ—

昨年軸装が終り、慶応元年(1865)の検地絵図を館内に展示しました。縦3.6m、横2.6mの大きな絵図に、現在の十和田市街地を中心として、北は市内元町北部から南は市内穂並町南端まで、西は中楸から東は六戸町折茂まで、細かく記されています。この絵図を見ているとそこから当時の町の色々なこと、そして時代の流れが見えてきます。

展示中の慶応元年検地絵図



馬頭観音社が 稲荷神社に

この場所は現在、稲荷神社として知られていますが、当時は馬頭観音社(馬の保護神・蒼前社)で、古くから人々の信仰を集めていました。絵図には鳥居と小さな社が見えます。馬産地だったことに由来しますが、その後三本木原開拓が行われ、新渡戸傳、十次郎が五穀豊穡をつかさどる稲荷神を、長く人々の信仰を集めていたこの場所でまつるようにし、現在にいたっています。



◀現在の三本木稲荷神社古い蒼前社は境内に駒形神社としてまつられています。



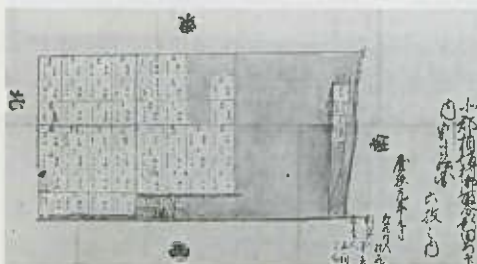
当時の重要な観測点「物見ヶ森」

現在の国道45号沿い、観音寺裏手にある丘は昔「物見ヶ森」とか「見目ヶ森」と呼ばれ、この頂上が七戸通(七戸代官所管轄)と五戸通(五戸代官所管轄)の境となっていました。寛文5年(1665)制作の三本木最古の絵図にも「ものもり」と記され村境の目印になっています。建物も何も無かった頃は、この小さな丘がこのあたりの重要な観測点になっていたのでしょうか。



◀この丘にのぼると当時の人の視点がわかるかも?

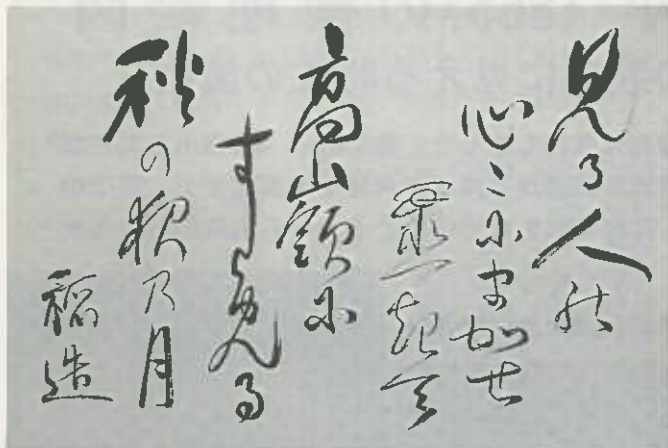
関連小絵図の裏打ちもほぼ完了



現十和田市内穂並町(国道四号東側)の絵図

◀『北郡相坂村御取分新田ろ印内割小絵図六枚の内』

新収蔵資料紹介



縦：47.5 横：62.5 (cm)

新渡戸稲造直筆の書

見る人の 心々に まかせ置きて
高嶺にすめる 秋の夜の月

意味：どのように見えるかは、見る人それぞれの心に任せて、彼方の峰に静かに澄んだ秋の月は光輝いている

稲造博士がもっとも好んだ古歌の一つで、作者は分かっていません。博士はこの歌の通り、人が自分をどう思おうとかまわず、自分の信じる通りに生きる事を信条としていました。そのため、この歌は『世渡りの道』『人生読本』『修養』など数々の著書に引用されており、また書人から頼まれると好んでこの歌を書いています。

平成11年5月3日～30日

たいそ 太素祭関連企画

稲生川上水記念展の開催を予定!!

毎年5月3～5日に太素塚境内で開催される“太素祭”は安政6年(1859)5月4日の稲生川上水成功を記念して開催されています。そこで、太素祭にちなみ5月3日～30日まで記念館において、上水成功当時の様子を紹介する記念展を開催する予定です。太素祭期間は、十和田市民だけでなく市外の方も入館無料となりますので、お誘い合せの上ご来館下さい。



開拓事務所で作られていた日誌などには上水成功当時の様子が詳しく書かれています。

〔通常十和田市民は無料、市外は大人210円、小中高生52円。20名以上から団体割引あり。〕



太素祭の賑わい

平成11年10月10日

十和田 花巻 新渡戸友好都市 締結10周年

花巻新渡戸記念館での記念展に 当館から資料を貸出し

花巻新渡戸記念館と当館は企画展開催等において近年特に協力体制を固め、多数の資料貸出、企画協力などを行ってまいりました。そして、今年10月10日で十和田市と花巻市の新渡戸友好都市締結10周年を迎えるにあたり、9月に花巻新渡戸記念館で企画開催する記念展に対して、当館としては資料貸出等で全面的なバックアップをしていきたいと考えています。



▶ 花巻新渡戸記念館は新渡戸氏が江戸時代初め南部家家臣となった時最初に住んだ安野村屋敷跡に建っています。

特 集 八戸藩士・蛇口伴蔵 三本木原開拓への偉大なる協力者

蛇口伴蔵は、侍でありながら商いにより莫大な財産を築きその財を八戸、そして三本木原の開拓へ投じた人物です。八戸での治水事業は成功しませんでした。偉大な郷土の開拓者として近年その事跡が見なおされており、八戸市では関係団体の協力もあり、現在蛇口伴蔵の銅像建立を検討されているそうです。しかし、蛇口はなぜ三本木原開拓に協力したのでしょうか？

偶然から三本木原開拓の協力者に

新渡戸傳の日記『太素日誌』によると、蛇口伴蔵が三本木原開拓に出資することとなったきっかけは、偶然の出会いによるものだった様です。安政2年(1855)の三本木原開拓着手から2年後江戸詰となった傳にかわって、息子十次郎が三本木で開拓の采配を振るう事となりましたが、開拓資金がなかなか集まらず苦勞していました。そして、安政4年(1857)9月五戸商人伊勢屋安兵衛の紹介で八戸の齋藤金弥が可能な分なら出資してくれると聞き、十次郎は齋藤宅を訪れました。するとそこに居合わせた蛇口伴蔵が、話を聞いて大金を融通してくれる事となり、10月には齋藤と蛇口から二百両を借り受ける事に成功したのです。

蛇口が長年もち続けた開拓の志

蛇口がたまたま聞いた三本木原開拓の話にすぐ大金を出す決心をしたのには、大きな理由がありました。蛇口伴蔵(胤年/号・山水)は21歳から47歳まで、藩の役職を務めるかたわら、侍でありながら商いをして蓄財に励んでいましたが、そのなりふり構わないやり方に、町の人々からは「商人侍」とか「侍商人」とかあだ名され、陰口を言われるほどでした。天保の飢饉の時、農民たちに餓頭まんじゆうなどの食べ物を売った話は有名です。そして、三十町余りの田地と三万両余りの現金、そのほか貸付金などの莫大な財産を築きましたが、それはすべて一つの志のためであったことが、安政4年11月寺下観音堂に蛇口が奉納した願文から分かります。「當田の第一とするは水なり(農業に一番重要なのは水だ)」という言葉で始まるこの願文には「水の便が良ければ八戸藩にも、たくさんの田が出来るだろうと若い頃からずっと考えていたが、貧乏で才能も無く何も出来なかった、そして今財をなした暁に開



太素塚境内にある位牌堂「顕彰堂」には、三本木原開拓への協力者として蛇口伴蔵の位牌も収められています。



◀蛇口は“卑怯未練”を徹底して嫌ったと伝えられています。事業の失敗を悟ったとき、記念碑を建てて諦めています。そんなところにも人柄が表れているように感じます。

拓を行いたいので力を貸して欲しい」という事が切々と書かれています。そして、蛇口は三本木原開拓へ出金した2日後、八戸藩へ上水事業計画書を提出していますから、十次郎との出会いが蛇口にとっても、自らの開拓着手を決心させる重要なものだったことが推察されます。蛇口は五つもの水路工事を計画し、内2つ〔安政6年(1859)下洗上水工事、文久元年(1861)階上岳上水工事着手〕に取りかかりましたが、この工事には新渡戸十次郎の協力により、三本木原開拓の土木技術者たちが従事しました。これは蛇口の資金協力に対し十次郎が技術協力をおこなったと考えられます。

下洗上水工事は万延元年(1860)完成、階上岳上水も元治元年(1864)に完成しましたが、地形的な問題や火山灰土という漏水しやすい土壌のため、二つの事業は結果的には失敗に終わりました。蛇口は富を使い果たし、ついに開拓事業を断念、慶応2年(1866)56歳の生涯を閉じています。



◀下洗上水トンネル入口跡



新渡戸 傳

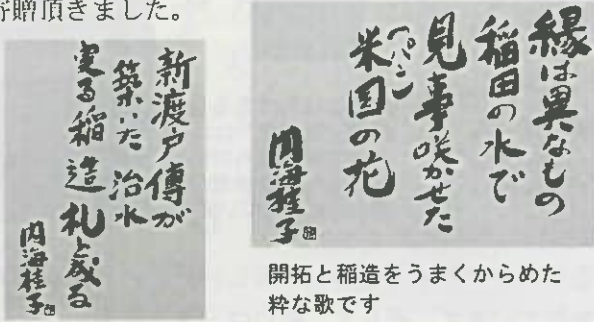
「蛇口は人傑なり」

安政6年10月蛇口は新渡戸傳に初めて会いましたが、その時さらに二千両余りを利息無し、返済期日なしで出資する約束をしました。「なぜそんな得にならない約束を？」と三戸の人から聞かれ、蛇口は「開拓の志を持って自分でもやっているが、散財するばかりでうまく行かない。しかし、新渡戸氏の大業を見てこの人に力添えすれば自分も世の中のためになれると思うから出資するので、返済をしてもらおうとも思っていない」と語ったと『太素日誌』に記されています。そして新渡戸傳は「誠に当時に珍しい人傑だと感心した」と記しています。

ありがとうございました

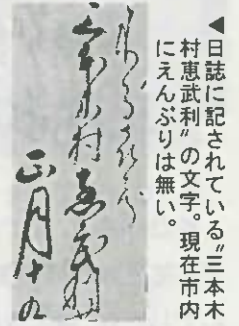
RAB 青森放送テレビ・(株)ジャン アム ジャパンより
内海桂子さん作三本木原開拓都々逸の書を受く

9年11月 RAB 青森放送テレビ『知れば知るほど!!
あおもり県』で三本木原開拓を紹介しましたが、番組
中出演者・内海桂子さんが書いた都々逸の書を当館へ
寄贈頂きました。



●RAB「南部えんぶり紀行」で市内元町に“えんぶり” があった事を発掘

RAB 青森放送テレビ 2月28日放
送の「南部えんぶり紀行」で三本木原
開拓事務所の日誌『開拓日誌』に周辺
村落だけでなく、三本木村(現・市
内元町)にもえんぶりがあり、正月
に会所へ来て踊ったという記述があ
る事を紹介しました。



記念館資料の提供

●青森県立郷土館企画展「描かれた青森」

(2月19日～3月22日)

青森県立郷土館で開催の平成10
年度企画展『描かれた青森』に、
当館から絵図面資料を貸し出しま
した。南部領の海岸ぞいを詳細に
描いた絵図や、新渡戸十次郎によ
る大畑の大砲台場の図など、日頃
展示されていない資料を中心に貸
し出しました。



図録に収録の当館資料

関連情報

●日経連根本会長が来館

県経営者協会菊池会長のご案内で日経連会長根本二郎
氏が昨年9月来館されました。
館長の解説で、記念館内と太素
塚境内にある新渡戸三代の墓所
をゆっくりと見学されました。



●命日祭にて太素顕彰会会長・十和田市長が新館構想に 引き続き取りくみたいと表明

昨年9月27日の命日祭式典において、太素顕彰会会長・
中野渡春雄十和田市長から「新渡戸記念館新館構想に引
き続き取りくみたい」との言葉がありました。昨年館内
の改装工事を行いました。来館者のニーズにあわせた
施設全体の整備が必要となっています。

●三沢市先人記念館の第十回企画展「^{やすとろ}廣澤安任交遊録Ⅰ」 (3月13日～6月27日)で、斗南藩士移住への新渡戸傳、 七郎の尽力を紹介

斗南藩記念観光村内の三沢市先人記念館で第十回企画
展「廣澤安任交遊録Ⅰ」を開催中ですが、その中で明治
初めの斗南藩士三本木移住に新渡戸傳と孫の七郎が果た
した役割等を紹介しています。

活動報告

●青森県史編さん室第3回近世部会に館長出席

2月13日～14日に県史編さん室において近世部
会が開催され館長が出席しました。

●県広報誌「マイあおもり」2月号「活彩人物伝」に寄稿

青森県広報誌『マイあおもり』2月号に新渡戸稲造
についての記事を寄稿しました。稲造と三本木原開拓
の関係を中心にその生き方について解説しました。

●十和田商工会議所の月刊広報誌「フロンティア」へ 新渡戸記念館紹介記事を連載

4月の商工会議所月刊誌「フロンティア」から、当
館江渡修一主任が記念館紹介記事を連載します。毎回
資料一点ずつを紹介していきます。どうぞごらん下さ
い。

〈編集後記〉

『新渡戸記念館だより』は、発刊からちょうど満四年を
迎え、お陰様で16号を発行する事ができました。

“継続は力なり”と言いますが、続けていく大変さを噛
み締めております。皆様のご協力をお願い致します。

発行 太素顕彰会
十和田市立新渡戸記念館
☎034-0031 青森県十和田市東三番町24-1
TEL (FAX) 0176-23-4430
印刷 有限会社 岩間印刷所